
僕は小説書き

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は小説書き

【コード】

N1069H

【作者名】

MMR

【あらすじ】

僕は趣味で小説を書く。それを邪魔をしてくる女が一人。一緒に小説を書くということだが本当にそうなんだろうか？

「なにこれ、そんな女の子がいると思ってるの？」

「小説だからいいだろ…そっちこそ、どんなに男を美化してんだよ。こんな完璧なヤツがいたらむしろぶつとばしたくなる」

休日の昼下がり、空調のほどよく効いた図書館のテーブルで、僕は気持ち良く趣味である小説書きを進めていた…はずだったのだが、横からちよこちよこと邪魔してくるのがいる。

「なによー、あたしの理想だもん。勝手にさせてよね。というか勝手に見ないでよ」

「その言葉、そのままそっちにも言いたいんだが…」

パソコンで編集している僕と違い、えんぴつを持ってまさしく小説を書くというスタイルをとっている女が、僕が覗き込んだのに気づいてノートに体を覆いかぶせる。

まったく、だったら最初からケチつけてくるなって話だ。

というか、なんでわざわざ僕はこの女と一緒に小説を書いているんだ…

そりゃ、小説を書くなんて趣味が合う人はなかなかいない。しかもお互いに恋愛小説なんて。

でも、だからといって一緒にいる必要なんてどこにもないはずだ。むしろ気が散って仕方が無い。

追い払えばいいだけの話なんだろうが、そんな邪険なことをしたら何をされるか分かったものじゃない。以前にも気分を変えて屋上で書いていたら、

「なんで勝手に場所変えてるのよ！」

なんて怒鳴られる始末だ。正直面倒くさくて仕方が無い。

「…ていうかさ」

その面倒くさい女が僕とパソコンの間に顔を入れて乗り出してく

る。

「なんだよ」

「この廊下の角で見知らぬ女性とぶつかって倒れたところを助け上げる？何このベタ展開！だいたいそんなうまくいかないわよ、もうちょっとリアリティある感じにしないよ」

「なんだその文句。いいじゃないか別に誰に見せるわけでもなし」

「私が見てるけど？」

「勝手にだけどな」

「むー、あーいえばこーいうわね…」

「どつちがだ…」

どちらかというところと最近、小説を書くことよりもこの女と色々言い合うことの方が多いい気がする。

もはや面倒くさい上にうっとうしいとまで思う。

「わかったわ」

「パス」

この流れは嫌な予感しかしない。途中の会話を省略して結論だけ僕は言った。

すると一瞬、彼女が微笑みを見せた。

…背中が凍りつくくらいだけど。

「いいからき・な・さ・い・よっ！」

次の瞬間には、僕の首根っこあたりをつかまれて引っ張り出されていた。

「なんでわざわざこんなことを…」

パソコンを放置されてどこかに連れてかれても困る、と思っていたが、連れられたのは目の前の本棚だった。

ここで、彼女は実験を言うとさう。

その実験というのがなんともくだらない。

「廊下でぶつかって倒れるなんて、そう簡単にいくはずないわ。今からこの本棚の角を使って再現するわよ、私が言ってることが正し

いことを証明してあげる』

もはやあきれるような内容だ。律儀にスタンバイしている僕も僕だが。

あくまで小説なんだから、リアルさまで求めていないって言うても聞きやしない。

「じゃあ行くわよー」

心の中で文句を言っていると、本棚の向こう側からずいぶん軽い声が聞こえてきた。

「はいはい」

まあちよつと付き合えばいいだけだ。そう言い聞かせて僕は返事をする。

「よーい、スタート！」

図書館の中なのでダッシュするとうわけにはいかないの、ちよつとだけ早いペースで僕は歩き出した。

そして、本棚の角。

確かにぶつかって倒れるなんてことはなく、むしろ予定外のことが起こった。

…小説みたいな出来事が。

更に小説のような出来事はまだ続いていく。

それは、この女と2人肩を並べることになる…

まあ、それは10年後のことなんだけどね。

「そついやさ」

「なあに？」

「あの本棚の角のこと…」

「ああ、ぶつかっただはずみにキスしちゃったこと？」

「ぶつ！なんでそんなストレートに言うかな…」

「だって、しょうがないじゃない。しちゃったんだから」

「あれ…わざとしたんじゃないよな？」

「ふふ…どうでしょう？ 事実は小説より奇なり、かもね」
…絶対、わざとだ。

この先、うまくやっていけるかな。

(後書き)

実験的作品です。

というより書き始めて着地点が見えなくなったとも言つ。

出会い頭にキスつての、どっかにあつたよな…

「イタズラなKiss」みたいなもんだつたかなと思つてg o o g
le先生で調べた結果正解だったのにビックリです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1069h/>

僕は小説書き

2010年10月12日07時59分発行